

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2013

課題番号：22659422

研究課題名(和文)訪問看護におけるキュアとケアの統合に関する研究

研究課題名(英文)Fusion of care and cure in home visiting nursing

研究代表者

川原 礼子(Kawahara, Reiko)

東北大学・医学(系)研究科(研究院)・名誉教授

研究者番号：40272075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、訪問看護師に質問紙による調査を行い、事例を介して自らの判断で行えると考えられる医行為およびその理由と、主治医へのインタビューによる医行為に対する認識を明らかにし、スキルモデルを作成することを目的とした。訪問看護師自らの判断にて行なえると認識している技術は17カテゴリーに分けられたが浣腸、導尿、および褥瘡ケアが多かった。理由には「速やかに患者の苦痛を緩和する有効な方法である」「対処方法を実行できる要素が揃っている」ことを挙げていた。主治医は看護師の判断を概ね妥当であると評価していた。得られたスキルモデルについてはワークショップの討議にて、現実性のある有効なモデルであると考えられた。

研究成果の概要(英文)：This study was undertaken to clarify home care nurse's recognition of skills which are able to put into practice by their own clinical judgment and to clarify client's family doctor's recognition about the scene of the case and nurse's judgment by interview. Having obtained 81 Questionnaire answers, we analyzed 17 skill categories. Especially enema administration of bowel elimination, catheterization of urinary elimination, and pressure ulcer care were chosen by many nurses. The reason why these skills were chosen as, are very effective methods to improve client's pain, and has already kept enough elements which can deal with a client, because nurses contact a patient for a longer time than doctors. About ten cases, we interviewed client's family doctor. They evaluated definitely nurse's skills. This result was discussed in the workshop, and was considered that 17 skill categories are realistic and appropriate model.

研究分野：老年看護学

科研費の分科・細目：看護学・老年・在宅看護学

キーワード：訪問看護 医行為 キュア ケア 看取り 在宅看護

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、我が国においては、近年、医療ニーズの増大を受けて厚生労働省の「チーム医療会議」で、看護職の医行為の業務拡大に向けた議論がなされようとしていた。

米国における看護職の医行為については、ナースプラクティショナー (NP) が 40 年の歴史をもつため、その職種の医療経済や QOL への貢献などの報告が多くみられる。一方、日本では数年前から NP の実現を提唱する文献(草間、2007)(緒方、2008)がみられていたが、医行為の在り方やそれに関連した法律のおよび制度的環境の整備を検討した研究も極めて少なく、「チーム医療会議」は、数多くの議論を重ねていくことが予想された。

申請者は臨床経験、教育経験を通して看護師の裁量権の拡大の必要性を強く認識し、日本の医療においても NP を必要とする状況が到来することを期待していたが、近年、訪問看護事業の伸び悩みや看護師の離職の問題、また、認定看護師が、現場ではうまく活用されていないことに直面し、在宅看護領域における抜本的な解決方法として業務拡大に向けた教育が今こそなされる必要性があると考えた。したがって、在宅看護を担っている主要な職種である訪問看護領域のケアとケアが統合された形の学問体系構築を目的とする本研究企画を提案する。

## 2. 研究の目的

日本では、地域で暮らす人々の健康や看取りの支援体制は深刻な事態を迎えている。その理由には医師不足、訪問看護事業の伸び悩みがある。認定看護師など高度実践職業人が誕生しているが、業務と診療報酬との関連は濃いものではなく、未だ有効なエネルギーになっていない。

したがって、本研究は、訪問看護師や利用者の主治医を対象とした調査により、具

体的な場面において看護師の判断で施行可能な医行為を明らかにし、それを基盤として、訪問看護師および高度実践在宅看護関連職種において自らの判断で行えるスキルによるケアとケアが統合されたモデルを検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

日本全国における訪問看護師および訪問看護認定看護師に質問紙による調査を行い、どのような医療行為が看護師の判断で可能と認識しているかについて問う。

報告されたそれら医療行為について、更に A 県において研究の趣旨に賛同して協力得られたいくつかの訪問看護ステーション看護師にインタビューし、自らの判断で医行為を行った、あるいは医師にその判断を報告して同意を得て行った場面の事例提供受けながら、看護場面における医行為の判断場面について状況や判断根拠を確認し、さらに、事例の主治医にインタビューして、その場面における医学的状況や看護師による医療行為についての認識を問う。

さらに、それらを研究分担者や協力者の間で討議しながら、訪問看護の学問体系と訪問看護師、認定訪問看護師および在宅看護専門看護師の役割についてモデルを作成する。また、全国的なワークショップを開催して、それらモデルの妥当性を検証する。

## 4. 研究成果

本研究結果から、以下の 17 項目の医行為が訪問看護師の判断できると考えていることがあきらかになった。すなわち、絶食と食事開始の判断と実施、胃ろう食材の調整、整腸剤の必要性と判断、グリセリン浣腸の実施、緩下剤の使用の判断・実施、緩下剤の量の判断・実施、尿閉に対する導尿・バルンカテーテル挿入、解熱のための薬物使用の判断と実施、疼痛緩和のための薬剤の使用、去痰薬の吸入の必要性に対する判断と実施、腰痛など

の慢性疼痛に対する湿布の必要性に対する判断と実施、褥瘡に関する判断およびそれに関する治療薬の判断と実施、症状悪化時の採血・採痰の必要性に関する判断・実施、血管確保・酸素吸入、呼吸停止確認、その他の17項目であり、とりわけ、排便・排尿コントロール、症状コントロール、および褥瘡ケアについては自信をもって自らの判断できると考えている訪問看護師が多く、その理由としては、「速やかに苦痛を軽減する有効な方法である」、「対処方法を実行できる要素が揃っている」、「利用者の状態悪化のリスクを少なくすることができる」などが挙げられていた。そして、裁量拡大については、条件を整備することで可能であり、本来的に質の高いケアを行うために裁量拡大は必要であると認識していた。

更に、訪問看護師に事例の場面の詳細についてと主治医に看護師の判断・実施の妥当性に関する調査を行った結果、訪問看護師は手探りの状況に置かれながらも、日々、生活を見ているがゆえの判断の世界をもっていることが明らかになった。また、主治医は判断の場面について、概ね「適切な対応である」と評価していた。

以上から、看護基礎教育あるいは、老年および在宅看護学といった領域別看護学において、看護教育に特化して行すべき医行為の教育モデルの骨格が17項目示唆された。それらの項目におけるキュア要因とケア要因の統合・融合による看護学体系の再構築が望ましいと考えられた。本研究からえられた結果は老年および在宅看護関連学会にて発表し、かつ学会誌に投稿した。更に平成25年9月にはワークショップ（看護におけるキュアに関する検討）を開催して研究結果を報告し、研究結果の妥当性について議論した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 齋藤美華、坂川奈央、大槻久美、川原礼子、高齢者の褥瘡ケアに関する訪問看護師の医行為の内容とその判断理由、北日本看護学会誌、査読有、16巻1号、2013年、33-42  
<http://mol.medicalonline.jp/library/journal/download?GoodsID=df6nnurs/2013/001601/004&name=0033-0042j&UserID=130.34.173.69>
2. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、訪問看護師の裁量拡大に対する当該職種の意見の内容、東北大学医学部保健学科紀要、査読有、21巻1号、2012、33-39
3. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、高齢者の排便ケアに関する医行為が訪問看護師の判断で行えると考えた理由、老年看護学、査読有、16巻2号、2012、65-71  
[http://ci.nii.ac.jp/els/110009425309.pdf?id=ART0009903222&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1400042943&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009425309.pdf?id=ART0009903222&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1400042943&cp=)
4. 川原礼子、齋藤美華、大槻久美、訪問看護場面の尿閉に対する医行為の実態およびその認識、査読有、看護実践の科学、37巻2号、2012、30-37

〔学会発表〕(計5件)

1. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、訪問看護場面における高齢者のケアに関する医行為の実態とその特徴、第23回日本老年医学会東北地方会、2012年10月13日、秋田市
2. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、訪問看護師の医行為に関する看護教育への希望 - 訪問看護場面において訪問看護師が実施した医行為を通して -、第15回北日本看護学会、2012年9月1日、黒川郡大和

町

3. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、訪問看護場面における高齢者の症状コントロールに関する医行為の実態とその認識、第17回日本老年看護学会、2012年7月14日、金沢市
4. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、訪問看護場面における高齢者の食の支援に関する医行為の実態とその認識、第55回日本老年医学会関東甲信越地方会、2012年3月10日、東京
5. 齋藤美華、大槻久美、川原礼子、訪問看護場面における高齢者の排便コントロールに関する医行為の実態とその認識、第22回日本老年医学会東北地方会、2011年10月29日、弘前市

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

国内外の別:

出願年月日:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ:

東北大学医学系研究科老年・在宅看護学分野  
<http://www.med.tohoku.ac.jp/org/health/71/index.html>

ワークショップ(H25.9.29開催)資料:看護におけるキュアに関する検討 - 看護師の医行為の裁量拡大という国民的ニーズに向き合って -

6. 研究組織

(1)研究代表者

川原 礼子 (KAWAHARA, REIKO)  
東北大学・大学院医学系研究科・名誉教授  
研究者番号: 40272075

(2)研究分担者

齋藤 美華 (SAITO, MIKA)  
東北大学・大学院医学系研究科・講師  
研究者番号: 20305345

(3)連携研究者

細川 満子 (HOSOKAWA, MITSUKO)  
青森県立保健大学・健康科学部・教授  
研究者番号: 20315542

大槻 久美 (OHTSUKI, KUMI)  
東北文化学園大学・医療福祉学部・准教授  
研究者番号: 80546341